

〔歴史学篇〕

【論文】

先史琉球人の海上移動の動機と文化 ——台湾と八重山諸島の文化交流の解明にむけて——

木 下 尚 子

Cultural Motivation in Seafaring of Prehistoric Ryūkyūans: The relation between Taiwan and Yaeyama Islands

Naoko KINOSHITA

要旨 (Abstract)

Visibility is the essential condition for sailing between islands, but the decision to start seafaring depends on cultural rather than geographical factors. In North Ryūkyū (NR) and Middle Ryūkyū (MR), seafaring is easy because each island in the island chain is mutually visible, and the route is open to Kyūshū in the north. The situation is different where an island is only visible from one side, in other words, where visibility is not mutual. People show little willingness to travel to the other island. In two of these cases, the case of Taiwan and the western part of South Ryūkyū (SR) shows almost no relation until the end of prehistoric time, while in the case of the Yaeyama Islands, there is only little contact between the islands of Tarama and Miyako. People who lived on the Ryūkyū Islands in prehistoric times were actively traveling overseas between neighboring islands that are mutually visible, on the one hand; while they remain passive in regions with little cultural relations or regions that are in far distance. Presumably, their life in islands surrounded by fringing-reefs which provide plenty of seafood was sufficient to live and no need to go out.

キーワード (Keywords): 先史時代、琉球列島、台湾、海上移動、高島、低島、目視、類型化、動機、裾礁型文化

1. はじめに一問題の所在

小稿は、人はなぜ海上移動をするのか或いはしないのか、を先史時代の琉球列島を通して検討するものである。琉球列島は日本列島の南部をなす列島で、188の島⁽¹⁾があり、九州島（以下「九州」）と台湾島（以下「台湾」）の間1260kmを南北弧状に繋いで、東中国海と太平洋の境界をなしている。この地の文化は、人が海上移動を繰り返すことを通して形成されてきた。

琉球列島の大半は亜熱帯気候に属し、黒潮が島々を洗って北上するため島にはサンゴ礁が発達している。その先史文化の特徴は以下の二つに集約される。

- ・ 亜熱帯環境に適応した独自の文化をもつ。
- ・ 南は台湾を介してアジア大陸、北は九州を介して本州・韓半島に通じる文化の回廊をなす。

前者を「独自性」、後者を「回廊性」と言い換えると、前者は15世紀に琉球国の成立に結実し、後者は縄文時代以来の人の移動を背景にした経済活動（貝交易）に収斂して、歴史時代に継承されてゆ

く。筆者はかつて、その「回廊性」が「北に開き、南に閉じ気味」であること、すなわち九州との関係は密接だが台湾との関係はきわめて疎遠であることと、その要因が「独自性」でもある裾礁型文化⁽²⁾にあることを述べた(木下2012)。

今回注目したいのは「南に閉じ気味」の部分である。琉球列島の西端に位置する八重山諸島と台湾には110kmの海域がある。八重山諸島側からは台湾を望むことができるにもかかわらず、またこれまで両者の関係について多くの調査・研究がおこなわれてきたにもかかわらず、台湾との往来を示す確実な考古学的資料は得られていない⁽³⁾。将来発見されることを含めても、2地域間の往来は消極的あるいは単発的であった可能性は高いだろう。台湾と八重山諸島の文化的交流の有無は2地域の問題に留まらず、台湾に係わるさまざまな文化が琉球列島に伝わるための扉の開閉に相当するとみられるので、この問題は琉球列島の歴史を考える上で重要である。

両地域の関係において注意されるのは、八重山諸島最古の土器「下田原式土器」(4300~3300 BP)⁽⁴⁾の登場である。近年の研究によると下田原式土器の時期は、台湾、中国東南沿岸、東南アジアからメラネシア・ミクロネシアに及ぶ海域において人類が頻繁に航海活動をおこなった時期にあたっている⁽⁵⁾。下田原式土器の登場も周辺海域のこうした動きと無関係ではなかった可能性がある。4000 BP以降の台湾では本格的な農耕社会が成立し2000 BP頃以降は鉄器の使用が始まるが、八重山諸島ではこの間に土器文化が消失してしまう。その後13世紀後半に至るまで台湾と八重山諸島間に文化的交流の痕跡は認められず⁽⁶⁾、その東北に続く琉球列島は東南アジア・太平洋にわたる人類の文化動向とほとんど無縁であった。

小稿は下田原式土器登場を含めた台湾と八重山諸島の文化交流の解明にむけて、琉球列島の先史人の海上移動の特徴を再検討するものである。海上移動の可否を裾礁型文化の特性に求める考えの基本は前稿と変わるものではないが、琉球人の海上移動を2島間の文化的関係を重視して改めて整理した。なお、ここでの海上移動とは偶発的なものではなく、反復され、歴史事象として認識される移動行為を指している。琉球列島における先史時代は、約1万年前から紀元後11世紀までの採集と狩猟・漁撈生活の時期をさしている⁽⁷⁾。

2. 地理的關係と文化

2.1. 琉球列島の地理的分断

琉球列島は東中国海と太平洋の境界をなす一連の地背斜で構成され、海上に出た地背斜の頂上が弓なりに続く列島である。島の連なりは二つの谷部(水深1000mのトカラ構造海峡と宮古凹地)によって南北三つのまとまりに分断されている。それらは、地理学で北琉球、中琉球、南琉球とよばれる(藤岡1985)(図1)。

北琉球から中琉球に至る島々は、相互に目視が可能な距離で隣り合っている(平均距離27km、最大距離57km)。北琉球と中琉球を分けるトカラ構造海峡は生物分布の境界線にもなっており環境上大きな意味をもつが、海峡を挟んだ二つの島の距離は35kmで、相互の目視に支障はない。相互に目視可能な位置関係は南琉球内の島々についても同様である(平均距離24km、最大距離65km)。ただ中琉球と南琉球を分ける宮古凹地は長さ220kmで、隣あう島を見ることができない。中琉球と南琉球の間は、目視できない距離の海域で分断されている(木下2012)(図2)。

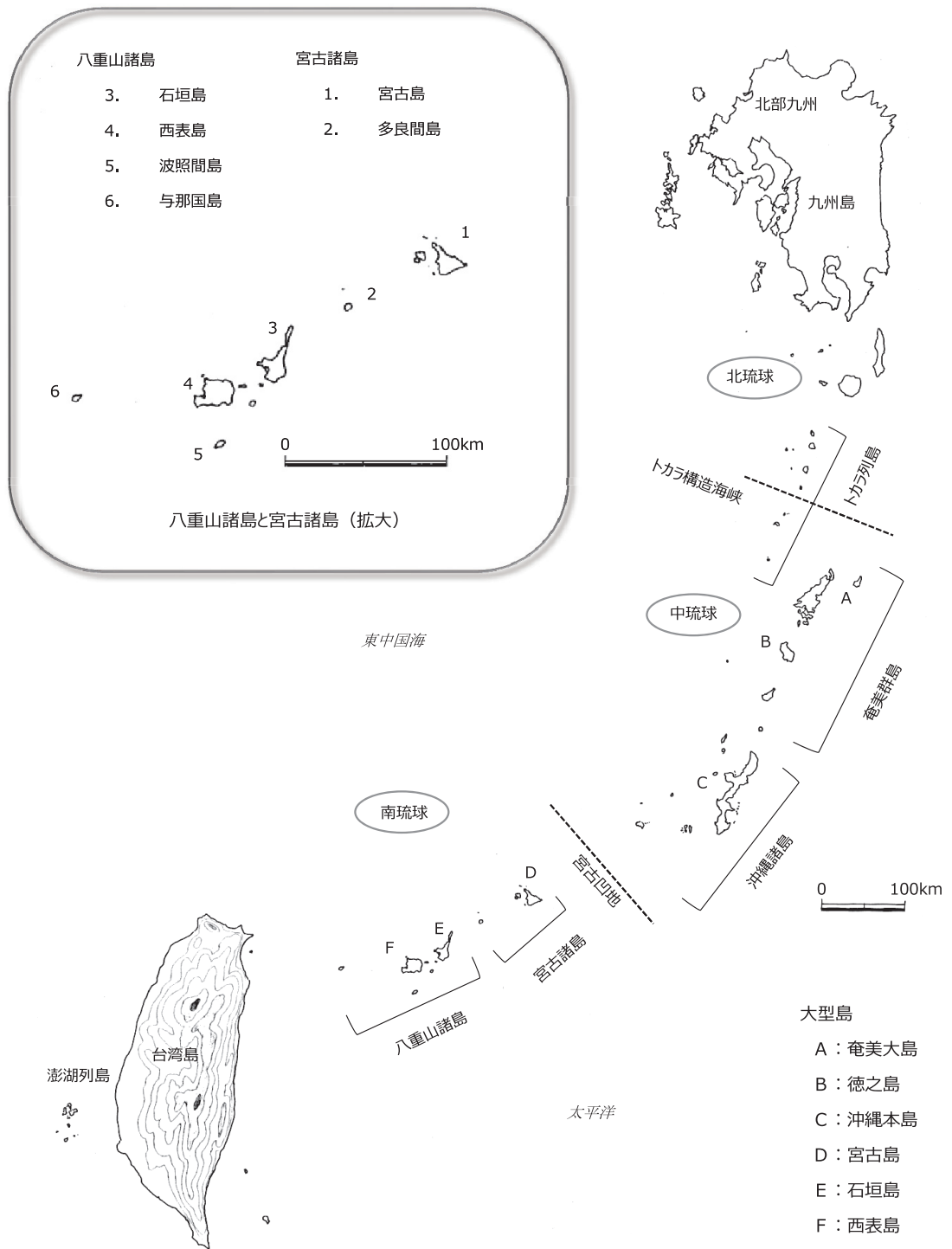


図1 九州・琉球列島・台湾位置図

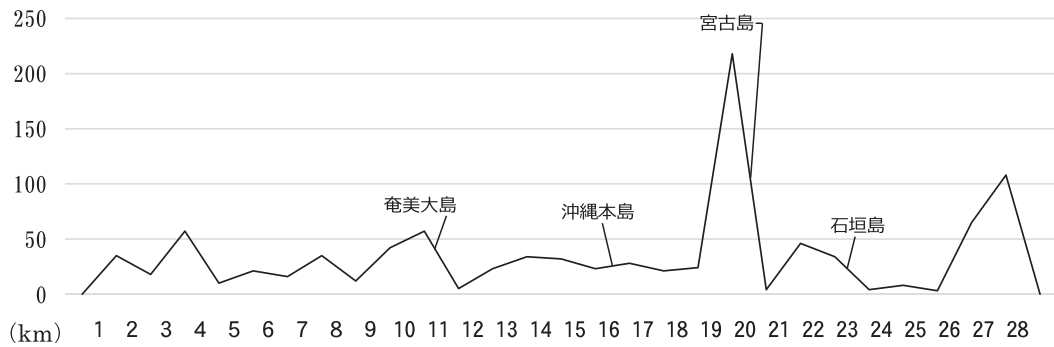


図 2-1 琉球列島の島間の距離 (数字は下図に対応)

- | | |
|----------|----------|
| 1 大隅半島 | 15 与論島 |
| 2 種子島 | 16 沖縄本島 |
| 3 屋久島 | 17 慶良間諸島 |
| 4 口之島 | 18 渡名喜島 |
| 5 中之島 | 19 久米島 |
| 6 諏訪瀬島 | 20 宮古島 |
| 7 悪石島 | 21 伊良部島 |
| 8 小宝島 | 22 多良間島 |
| 9 宝島 | 23 石垣島 |
| 10 横当島 | 24 竹富島 |
| 11 奄美大島 | 25 小浜島 |
| 12 与路島 | 26 西表島 |
| 13 徳之島 | 27 与那国島 |
| 14 冲永良部島 | 28 台湾島 |

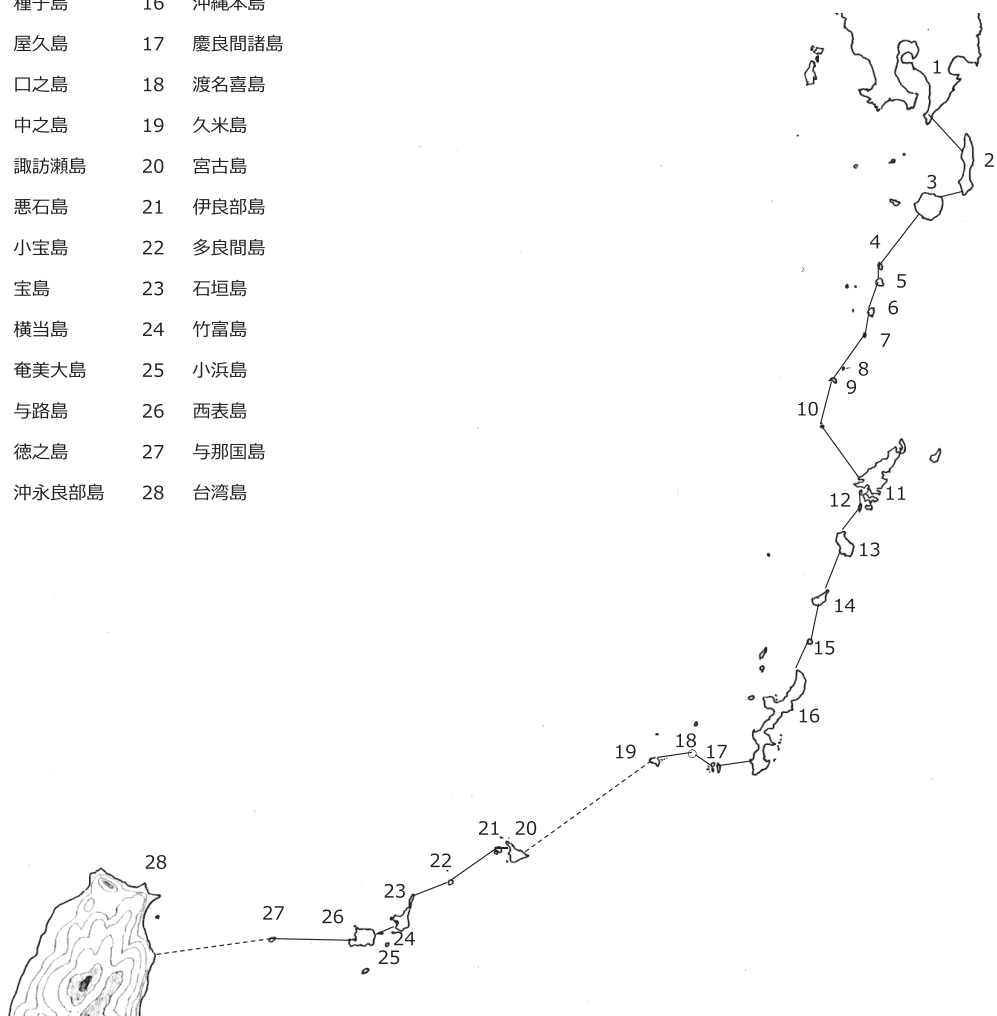


図 2 九州南部と台湾を結ぶ琉球列島のルート

2.2. 琉球列島の文化的分断

琉球列島の先史文化は、こうした地理的關係とよく対応している。北琉球と中琉球の在地土器の型式には器形や文様において共通性があり、相互に影響しながら展開してきたことがわかる（高宮1978）。北・中琉球の島々には先史時代を通して九州の土器文化が断続的に及んでおり、その影響は北に強く、南に弱い。これに対して南琉球の文化は中琉球の文化とほとんど無関係で独自色が強い。南琉球の4300～3300 BP（下田原期）には土器を使う文化が存在するが、約500年の資料の空白期を挟んで2800～1200 BPの期間は土器のない文化が継続する（無土器期）。ここには九州の文化も及んでいない。南琉球と中琉球の文化が会うのは、中琉球に大型船が登場する12世紀である。

2.3. 低島と高島

このようにみると、人の移動と文化の共通性は、島どうしが目視可能であるかどうか深くかかわっていることがわかる。目視の可否は島間の距離の長短におよそ比例しているが、さらに島の大きさ、とくに高さへの注意が必要である。島が低く平らな場合は遠くから見えにくいので、島間の距離が短くてもただちに人の移動と結びつかないからである。

琉球列島には更新世の隆起サンゴ礁による地形が多く、島に山が無い場合は海上から目視しにくい。しかしこれとは成因を異にする山のある島が南北带状に分布し、サンゴ礁地形の島に混在しているため、全体としてみると北琉球・中琉球、南琉球の内部ではそれぞれ目視の条件が満たされているのである（図3）。

地理学者の目崎茂和氏は、琉球列島のこのような島の地形的特徴を分類し、高島と低島に分けた（目崎1980）。高島は山地卓越型の島を指し山地島や火山島が含まれる。低島は台地卓越型の島を指し、台地島や隆起サンゴ礁の島、砂州島が含まれる。高島は古期岩類・火山岩が豊富で赤黄色の酸性土壌が多く、土器を作るための粘土や石斧の材料となる変成岩に恵まれている。丘陵や山地には照葉樹林が広がり堅果類が実りイノシシが生息する。河川水系による水は軟水である。これに対し低島では大規模な森林に乏しく地下水系によるわき水が多く、水は硬水である。地表は琉球石灰岩の風化土壌に覆われ土は中性からアルカリ性をなす。陸上動物は貧弱な一方で、島の周囲にはサンゴ礁が発達し、豊富な海産資源に恵まれている。琉球列島では高島は54、低島は52を数える⁽⁸⁾。

海上移動に不可欠な船については、沖縄本島宜野座村の前原遺跡で紀元前2000年の丸木船が1艘発見されている⁽⁹⁾。船材はシイ（オキナワジイ *ssp. lutchuensis*）で、沖縄本島北部の山林で造られたものであろう。琉球列島の先史遺跡では木工具とみられる厚手の両刃石斧や片刃石斧の出土も頻繁であり、人々は高島で丸木船を製造していたとみられる。

3. 文化的関係

高島と低島の混在する琉球列島において、実際の島の見えやすさや見えにくさは様々である。ことに一方からのみ見える2島間の関係は複雑で、目視がただちに文化的関係の構築に繋がるとは限らない。

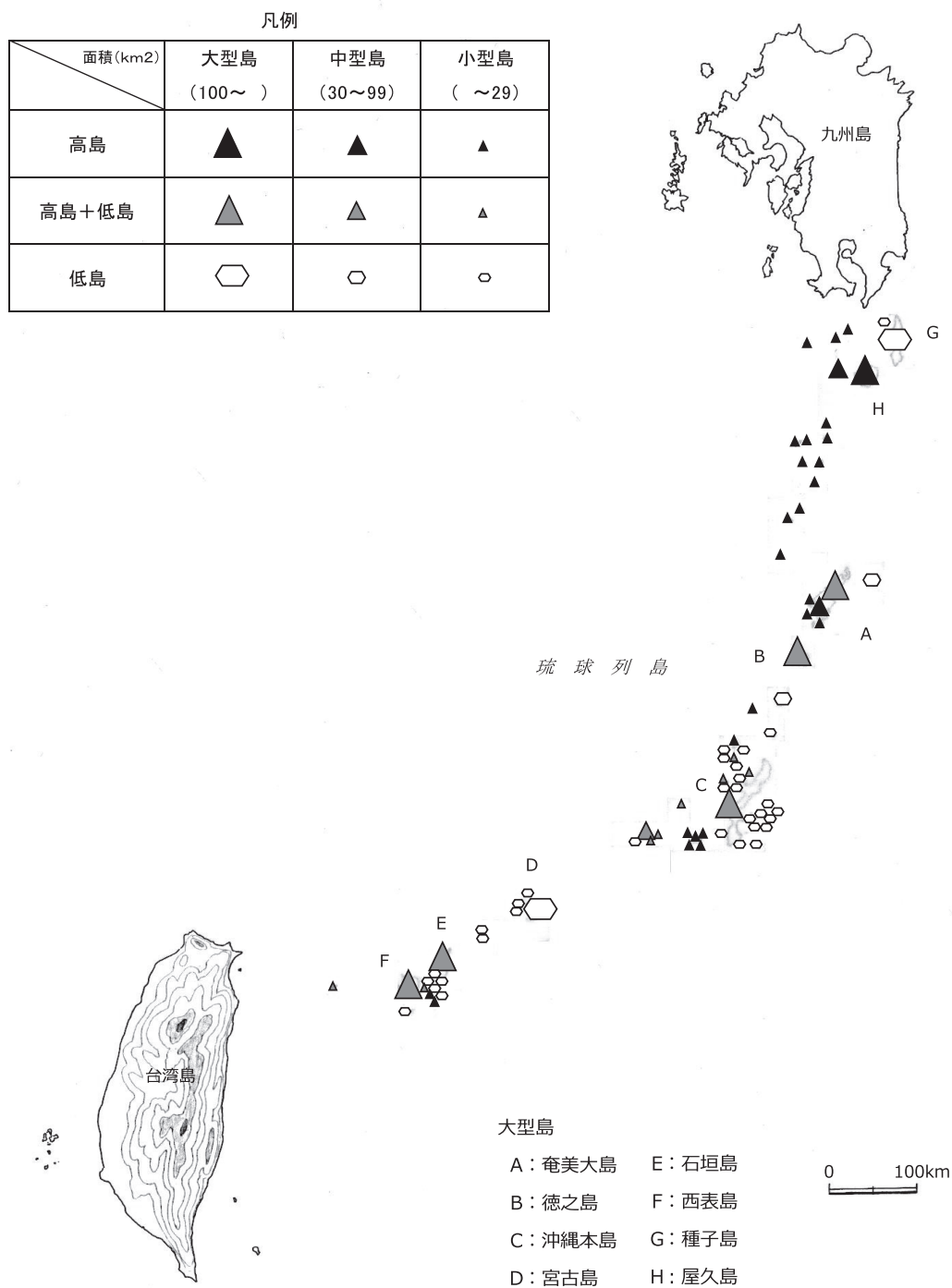


図3 琉球列島の高島と低島の分布（目崎1980をもとに作成）

3.1. 八重山諸島と台湾

3.1.1. 八重山諸島の下田原式土器文化

八重山諸島は南琉球の西南端に位置する大小18の島からなる島嶼群である。高島と低島の性格をあわせもつ石垣島と高島の西表島を中心により小さな高島と低島が分布する。与那国島はその中の西端の高島（28km²、最高標高231m）である。与那国島から台湾の東海岸までの最短距離は110kmで、条件のよい日には西方海上に台湾の島影をのぞむことができるという。これは台湾の3000m級の山（雪山山脈、中央山脈）の存在が大きい。これに対して台湾から与那国島はほとんど見えない。こうした一方向からのみ見える島同士の関係は、相手の島が見える方からの接近によって始まるだろう。高い山のある島に魅力的な物産があれば、もう一方の島からの積極的な接触が予想される。

八重山諸島では4300～3300 BPに下田原式土器とよばれる特徴ある土器文化が展開する（図4）。下田原式土器は厚さが1 cm～3 cmの分厚い平底の鉢形土器で稚拙な作りをなし、胎土に石英や長石を多く含む土器である。両側に拳状の把手をもつもの（図4の1、2、16）や文様を刻むもの（同7、13、15）、丸底に近いものと平底（同9～11、18～21）の変化がある。下田原期の人々は海岸沿いに住み、その生活はサンゴ礁での漁撈と森林でのイノシシ狩猟、植物採集に依拠したものであった。人びとは土器のほかに局部磨製石斧、多様な貝製品、骨針、イノシシ骨製工具、鯨歯製装飾品等を製作していた。下田原期の人々は、面積の大きい高島（石垣島・西表島）を本拠地にして、周辺の低島（波照間島、多良間島）に生活の場を拡げながら、サンゴ礁と森林に適応した漁撈・狩猟・採集生活を営んでいた（島袋ほか編2008）。

3.1.2. 台湾の^{じんとうぼ}訊塘埔文化

下田原期と並行する時期の台湾には縄紋陶文化が広くみられる。この文化はそれ以前の大坵坑文化（6400 BP～4200 BP）を基盤に地域ごとに分化発展した文化とされる。この時期一部の人々は穀物を消費していた⁽¹⁰⁾。八重山諸島に近い台湾北部から東北海岸北部には訊塘埔文化（4800 BP～3500 BP）とよばれる縄紋紅陶を主体とする文化が展開した。縄紋紅陶は縄目を残す叩き成形によって作られており、下田原式土器に比べるとかなり薄手である（図5）。

訊塘埔文化では稲作が定着し、この時期集落は長期にわたって存続し大規模化する。訊塘埔文化の遺跡は海岸や淡水沿岸に沿って分布することから、船舶の使用が推測されている。中華民国中央研究院の郭素秋氏は、土器・石器の比較から訊塘埔文化の登場は対岸の浙江省良渚文化後期文化、福建省曇石山文化後期文化ならびに珠江三角州の文化を含む中国東南沿岸地域の文化的影響があること、この時期に円形旋截技法⁽¹¹⁾等玉加工技術が導入されたこと、玉加工や土器製作の技術をもった人々が中国から渡来したことを指摘している⁽¹²⁾。人々の渡海の動機は明らかではないものの、5000～4000 BPに中国東南沿岸地域から台湾に土器や玉器づくりの技術が伝播していること、これに影響を受けた在地の遺跡が沿岸に多く登場したことは重要である。遺跡では、磨製石斧、片刃石斧、石包丁等の工具、玉（ネフライト）の工具・鎌・装身具がみられる（劉2002、郭2016）。

3.1.3. 八重山諸島と台湾

4000 BP前後、相互に110kmの海を挟んだ台湾と八重山諸島の先史文化には、文化内容や技術において明確な違いがある。訊塘埔文化は土器製作や玉製品加工技術において高いレベルをもち、永続性

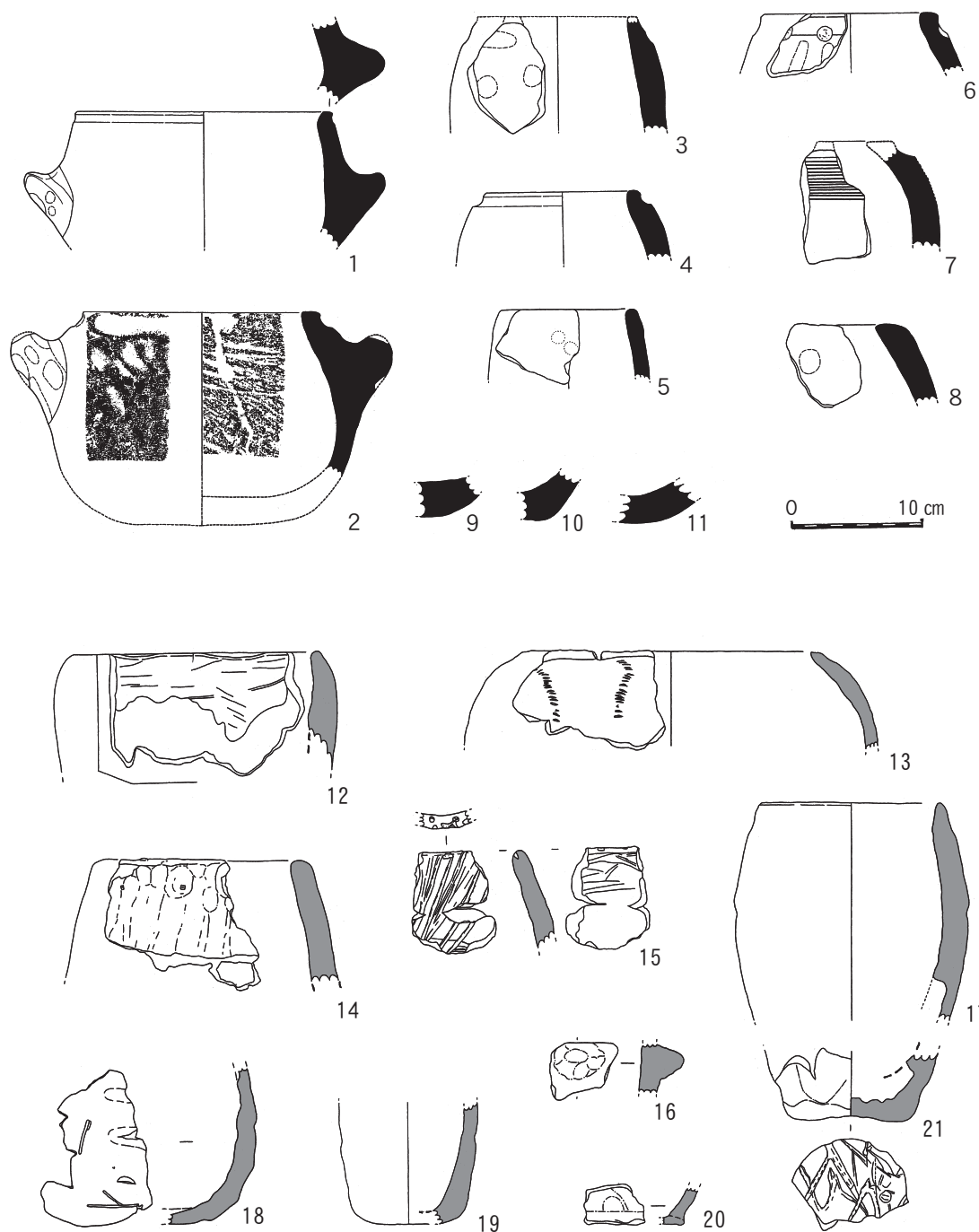
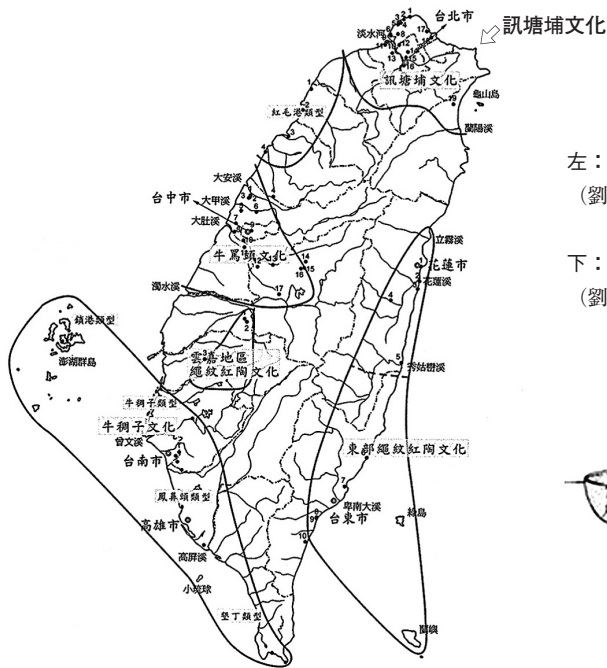


図4 下田原式土器

1～11：下田原貝塚（波照間島）、12～21：ピュウツタ遺跡（多良間島）
 （1～11：金城ほか1986引用、12～21：島袋編1997 一部変更の上引用）



左：台湾新石器時代中期（4600～3400 BP）の文化分布
（劉益昌2011；153頁図21引用、一部改変）

下：訊塘埔文化の土器（淡紅色夾砂土器）
（劉益昌2011；155頁図22引用）



図5 台湾訊塘埔文化の分布域と復元された土器

のある農耕社会を構築しつつあるのに対し、下田原期の文化はサンゴ礁環境に適応した採集経済の社会を継続している。台湾が目視可能な島であることをふまえれば、下田原人が鉱物資源、動物資源の圧倒的に豊かな台湾の情報を入手していた可能性は高いと推測されるが、接触を示す直接的証拠は不明瞭である。この状況は台湾が鉄器時代に入っても（2000 BP）変わらず、その間、八重山諸島では土器製作の技術が消失してしまう。紀元12世紀前半に沖縄からの船が到着して八重山諸島に陶器や磁器がもたらされ、13世紀後半に中国・台湾からの交易船が到達して両地域は初めて接触に至る。2 島間の接触は、先史時代が終わるまで往来の直接的痕跡を残すことはなかったのである。

台湾大学の陳有貝氏は両地の先史文化を生業において比較し、その違いを以下のように整理した。

- ・宮古諸島・八重山諸島の先史人は漁撈と狩猟を重視した生活をしている。
- ・台湾東海岸では穀物栽培が発達し、内湾・河川漁撈が盛んな一方、外洋における漁撈は不振である。

台湾からはほとんど目視できずかつ資源の乏しい八重山側に、農耕民である台湾先史人が接触する動機が低いのは当然としても、八重山先史人による対岸の文物の入手くらいはあってよいように思う。台湾南部の墾丁遺跡と鵝鑾鼻遺跡は下田原貝塚とほぼ同時期の遺跡で、そこから特徴ある回転研磨技法によって製作されるイモガイ珠が検出されている。1991年、筆者は共通する加工痕跡をもつイモガイ珠が両者を関係づける糸口になるのではないかと指摘したが⁽¹³⁾、その後これに呼応する資料は知られていない（木下1991）。2013年に郭素秋氏によって指摘された台湾および東南部の土器づくり技法である「泥片貼築法」と「叩き技法」は、下田原式土器の分析に有効であるとみられる（郭2013）。両者間の交流の痕跡が、在地文化の中に埋もれている可能性も考える必要があるだろう。

3.2. 宮古島と多良間島

宮古島は八重山諸島の東35kmにある宮古諸島の1島で、石垣島との間に小さな多良間島を挟んで存在している。宮古諸島を構成する8島はすべて低島である。宮古島は面積159km²、最高標高115m、多良間島は面積20km²、最高標高34mで、どちらも海上からは目視しにくい地形である。八重山諸島東端の石垣島と多良間島は相互に島を見ることができるが、多良間島と宮古島間ではこの関係が成立していない。すなわち多良間島から宮古島は見えるが宮古島から多良間島は見えない。

こうした地理関係は下田原期の文化状況と対応している。すなわち現在の資料でみる限り、下田原期の文化は石垣島から多良間島まで伝わり⁽¹⁴⁾、宮古島には伝わっていない。石垣島との交流が認められるのは下田原期の500年後、無土器時代(2800~800 BP)になってからである⁽¹⁵⁾。この時期には石垣島から石材やイノシシがおそらく多良間島経由で宮古島にはいるものの、遺跡の出土遺物をみる限りこれらが宮古島人の生活に占める割合は低い。宮古島の人びとは焼石調理を行い、シャコガイで斧や鑿状の工具(貝斧)を製作する等、独自の物質文化を生みだしている。宮古島の先史人は、高島に多くを頼らず低島独自の生活を継続していたとみられる⁽¹⁶⁾。

宮古島、多良間島、石垣島の先史文化は、環境においても生業基盤においても相互に共通点が多い。おそらく言葉も通じていたであろう。宮古島にない生活物資は石垣島にあり、多良間島を介して時折入手されてもいた。そうであるにもかかわらず、宮古島人は石垣島との往来に消極的であった。資源の豊富な島への行きにくさ(宮古島からはほとんど見えない多良間島を介して石垣島に行かねばならない)が、資源の乏しい島に独自の文化形成を促した例と理解することができる。

3.3. アンダマン諸島の例

アンダマン諸島はインド東部のベンガル湾に南北353kmにわたって連なる丘陵性の島々で、気候は熱帯に属し、島の周りにサンゴ礁が発達する等、琉球列島と共通する面が多い。島の連なりはダンカン水道によって南北に二分され、北が大アンダマン(Great Andaman)、南が小アンダマン(Little Andaman)と呼ばれている。ダンカン水道の幅は51kmであるが、8kmから22kmの距離で小島が飛び石のように存在し、両者間をつないでいる。したがって大アンダマンと小アンダマン間の移動はきわめて容易であったといえる。

1906~08年にアンダマン諸島を調査したイギリス人の人類学者ラドクリフ・ブラウン(Radcliffe Brown)氏の報告によると、大アンダマンと小アンダマンの人々は、それぞれ言葉も文化も異なり、調査時の20世紀に至るまで相互に敵対する関係にあるという。人びとは相手の島を認識しながらも親和的な接触を拒否していたのである。ただ両者の言語に共通する面もあることから、ブラウン氏は、人びとがこの諸島に入植後の極めて早い時期に地理的に分かれて生活をした結果、言語や文化の断絶が生まれたと推測している。アンダマン諸島の例は、2島が相互に目視できる距離にあっても、その関係は非親和的であることを含めて選択的であることを示している。考古学資料による限り、琉球列島においてこのような例はまだ確認されていないが、考慮すべき民族例である。

以上の3例(台湾と八重山諸島、宮古島と多良間島、アンダマン諸島)は、島間の海上移動が可能であっても、恒常的な往来関係が成立するとは限らないことを示している。人々の海上移動を最終的に決定する根拠は、結局人びとの文化の中にあるといえる。

4. 経済的關係

海上移動による文化的関係には、経済活動（生業の延長、交易等）、儀礼行為（クラのような体系的贈物交換⁽¹⁷⁾）、日常的な互助（婚姻、近所づきあい等）がある。琉球列島の先史時代では、経済活動と日常的な互助による海上移動の資料が豊富である。

4.1. 遠距離交易（図6）

紀元前1千年紀の初め、琉球列島において貝殻を交易する経済的關係が九州と中琉球（沖縄諸島）の間で始まった。これは北部九州の弥生人が、サンゴ礁に生息する大型巻貝を腕輪の素材に選び、この入手のために琉球列島を南下して沖縄に至ったことに起因する。間もなく沖縄人と弥生人との間に恒常的な交易が始まり、弥生人は米や豆等の穀物⁽¹⁸⁾、ときに鉄器等と引き替えに、2種類の大型巻貝（ゴホウラ類⁽¹⁹⁾・イモガイ類⁽²⁰⁾）を入手するようになる。この交易は、消費者である弥生人と貝殻提供者である沖縄人、貝殻を運搬する海人の三者が関わり、人と交易品が1000kmの海域を南下北上する長距離交易となった（木下1989）。運搬を担当したのは西北九州および南九州の沿岸民と中琉球北部の島民（奄美人）である。この関係は、以下の考古学資料によって明らかにされた。

- ・ 北部九州の弥生時代の遺跡で、サンゴ礁の海にだけ生息するゴホウラ類とイモガイ類を使った腕輪が流行する。
- ・ 同じ時期の中琉球（沖縄）の遺跡で北部九州の弥生土器が出土し、ゴホウラ類・イモガイ類の貝殻だけを集めた集積が残される。
- ・ 沖縄で、弥生人の腕輪のために粗く加工された未成品（粗加工品）が多くみつまっている。
- ・ 同じ時期の中琉球に九州西海岸の沿岸民に特徴的な墓（箱式石棺墓）が残される。

弥生人の貝輪では、1個のイモガイ貝殻あるは1個のゴホウラ貝殻から作ることでできる腕輪の数はそれぞれ1個に限られる。これまでに九州の弥生時代の遺跡で発見されたゴホウラ類とイモガイ類の腕輪の総数は662で、これらのほとんどは人の腕にはまったまま墓で見つまっている。一方沖縄諸では138基の貝殻集積がみつかり、そこに集められた貝殻総数は1505である。腕輪も貝殻集積もまだ多くが地中にあり、海上運送の途中で海に沈んだ貝殻も少なくなかっただろう。これらをふまえると実際には膨大な数の貝殻が交易されていたと考えられる。

貝交易は弥生時代を通して約1000年継続した。その後短い中断期を経て4世紀には消費の中心地が北部九州から本州（近畿地方）に変わり、さらに5世紀に消費地は再び九州にもどる。九州と中琉球との経済関係は結局7世紀まで続くが貝殻の需要は次第に減少し、7世紀前半、先史時代以来の貝交易は収束する。8世紀、本州（本土）に古代国家が形成されても大型巻貝の新たな需要は生まれず、中琉球は本土の人々にとって交易の対象地でなくなってしまう。9世紀後半、中琉球のヤコウガイ⁽²¹⁾とホラガイ⁽²²⁾が工芸品（螺鈿）の素材や仏教の道具として本州で必要とされ、琉球列島と本土との貝交易はようやく再開する。この交易は構造船による商業活動に取り込まれて14世紀まで続き、15世紀以降は琉球国の貿易の一品目となって独立性を失い終了する。

こうした交易の盛衰は消費者の需要如何に左右され、物産を運ぶための海上移動も、時どきの経済事情に応じて消長する限定的なものであった。いかに長期間継続し、どれほど多くの人々が関与してようと、需要の消滅とともに移動の連携は切れ、地域ごとの互換的移動にもどる現象が認められる。

4.2. 一方向の移動

琉球列島の貝交易は、亜熱帯の大型巻貝に価値を見出した温帯の人びとの需要によって成立し、交易する貝殻の種類を変えながら2300年にわたって断続的に続いた。この間沖縄には交易品である穀物や金属器等が継続的にもたらされたと考えられる。交易に係わる人の動きは常に一方的で、貝殻を必要とする北の人間が、南の貝殻産地に出向いて交易し貝殻を持ち帰るというものであった。もし沖縄人が消費地の文化を希求すれば、あるいは運搬を担う奄美人が消費地の文物を欲すれば、彼らは自ら北上して九州に赴いたであろう。そうであれば中琉球人特有の道具が九州で見つかったり、その墓が途中の島に残されたりするであろう。しかし現在のところそうした痕跡は見つかっていない。

結局琉球列島の貝交易において人の動きはすべて北から南であった。十分な人的交流と長い接触の時間があっても、琉球の先史人が相手の地に赴くとは限らないことを貝交易は示している。中琉球人にとって、穀物栽培や鉄器は、自ら北上してまで取り入れたい文化ではなかったのかもしれない。

なぜそうなのかは簡単に答えを提示できない問いであるが、「サンゴ礁に依拠した裾礁型文化の高い安定性が人々の裾礁の外に向かう行動を制御したため」を、理由の候補に挙げておきたい。人が海上移動をするか否かの判断は、最終的にはその島の文化事情に拠るとみてよいだろう。

4.3. 互助的な移動

琉球列島の先史人にとってもっとも住みやすい島が、高島的な環境に低島的な要素を併せ持ち、さらに一定の面積を備える島（以後「高島＋低島」と表記）であることは、高島と低島の特徴をみれば明らかである。

中琉球と南琉球において面積100km²以上の島を仮に「大型島」とし、同様に面積30km²以上100km²未満の島を「中型島」、30km²未満の島を「小型島」と呼び分けると、大型島は6島で、このうち5島が「高島＋低島」である（沖縄本島、奄美大島、徳之島、石垣島、西表島）⁽²³⁾。先史遺跡はこの5島に集中しており、「高島＋低島」の大型島が地域の文化的拠点になっていることがわかる。

中琉球と南琉球の島の構成を表1に示した。それぞれの諸島は、大型島を中心に、中型島と小型島が組みあって構成されている。この中の低島は、資源の豊富な「高島＋低島」や高島と日常的な往来を続けながら、互助的な関係を維持していたとみてよいだろう。土器型式の共有や、地域的な文化圏の形成はこうした日常的な移動によるとみてよい。

表1 中・南琉球の島の構成

面積・地形 島		面 積			地 形		
		大型島	中型島	小型島	高島	高＋低*	低島
中琉球	奄美群島	2	3	5	5	2	3
	沖縄諸島	1	1	50	21	9	22
南琉球	宮古諸島	1		7			8
	八重山諸島	2		13	4	4	7
計		6	4	75	30	15	40

* 「高＋低」は高島の要素と低島の要素を兼ねる島をさす

5. 海上移動の類型化

これまで述べてきた海上移動の実例を、「地理的關係」、「文化的關係」を基準に分類し、これに「移動手段」、「移動頻度」、「移動の方向」を組み合わせて整理した（図7）。

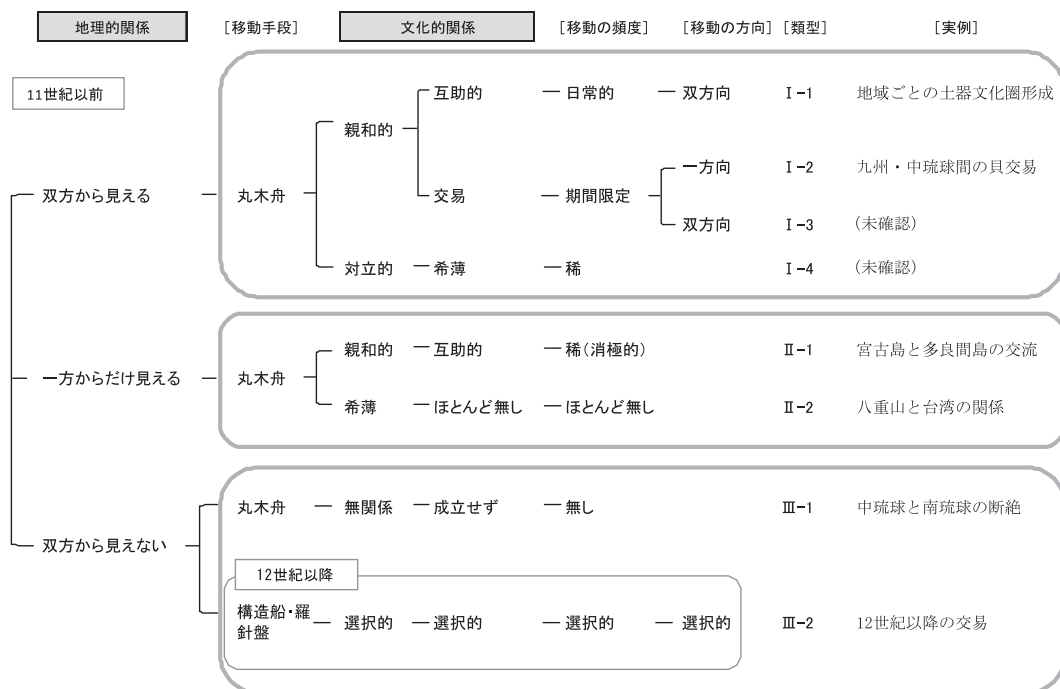


図7 琉球列島における海上移動の類型化

先史時代人の海上移動は有視界航路の可否で大きく分かれる。11世紀までの琉球列島の海上移動は、双方の島が見える者どうしの互助的移動が一般的である。これは琉球列島の島間が近接していることと、低島の間に点在する高島が有視界航路を容易にしていることによる（類型I-1）。琉球列島の島々は高島と低島の性格をあわせもつ大型の島を中心に文化を共有し、この互助的移動をもとに、弥生時代以降北琉球と中琉球に長距離交易が断続的に2300年続いた（類型I-2）。この移動行為は長期にわたったにもかかわらず、北からの経済動機にもとづく一方的なものに終始し、双方向の経済交流（類型I-3）に展開せず、また九州以北の人々の消費の盛衰に左右されるという限界があった。類型I-4はアンダマン諸島の事例に対応する。

2島間において有視界航路が一方からのみ可能な場合は、一定の経済的必然性があっても、その往来は消極的で、在地の状況に適応した孤立的な生活スタイルが生まれる傾向がある（類型II-1）。2島間に往来の必然性を見いだせない場合、2者の接触はほとんどなく文化の共通性も育たない（類型II-2）。有視界航路のできない中琉球と南琉球との間には12世紀に至るまで往来が認められない（類型III-1）。有視界航路の限界を突破するのは、目視できない状況を補う知識と技術の登場と、これを起動させる経済動機である。羅針盤を備えた構造船の登場は琉球列島の海上移動の構図を大きく

変え、これとともに琉球列島の先史時代は終わりを告げる。

図7は琉球列島の例であるが、例えば台湾を主体にした場合、先史人が渡海して石材（玄武岩）を採取した澎湖列島と台湾本島との関係は、澎湖列島からのみ相手が見えるという関係である（41km）。両地間の往来が頻繁であったのは、澎湖列島から台湾本島への接触があり、台湾側がまた澎湖列島の物産を必要としたからである。台湾側からの澎湖列島への経済的な動機が八重山諸島との関係とは大きく異なる結果を導いていることがわかる。中国本土と澎湖列島間には目視関係が成立していないにもかかわらず、6000～4000 BPには中国沿岸からの文化が澎湖列島を越えて台湾に到達している（劉2011、臧2012）。中国沿岸の金門島から澎湖列島までは137km、島の見えない海域を中国東南沿岸の先史人はしばしば越えているのである。彼らには有視界航路の限界を超える航海技術と動機があったのだろう。

以上から明らかなように、台湾の西側と東側では、先史時代における人の移動が見事に対照的である。島の西側、すなわち台湾海峡の兩岸の先史人は、一方のみから島が見える状況の海を越え（41km）、さらに島どうしが見えない関係の海をも越え（137km）、6000 BP以来台湾海峡（164km）を横断している。かたや島の東側では、一方のみから島が見える関係の108kmの海が13世紀まで越えられていない。台湾の先史人の意識はしばしば西に向かい、十分な航海術をもちながらも東には向かわなかった。東の八重山諸島人も西方はるかに見える台湾に行かなかったのである。両者の文化的選択が琉球列島の先史文化に与えたもの（与えなかったもの）は小さくないだろう。

6. 結語

琉球列島の先史人の海上移動について、以下をのべた。

- ・琉球列島ではそれぞれ地理的な成因の異なる高島と低島が混在しており、目視可能な島が連続している。北琉球・中琉球に所属する島間、同じく南琉球内の島間では内部の海上移動が頻繁で、高島と低島の要素をもつ100km以上の島が核になって共通の文化圏が形成された。しかし、中琉球と南琉球の間には目視できない距離の海域があるため、文化は分断されている。
- ・人々が島と島を往来するための前提は相互に目視できることであるが、実際に日常的な行為として相手の島と往来するかどうかは、島それぞれの文化的事情によって最終的に判断される。
- ・片方のみから目視できる関係の場合、島嶼間の往来は消極的になることが多い。
- ・北琉球・中琉球では、目視可能な島の連続によって九州との移動関係が継続し、人の動きは北に向かって開いている。この関係を利用して九州と中琉球を結ぶ遠距離交易が2300年にわたって断続的に続いた。
- ・南琉球では台湾との間の移動関係の痕跡が不明瞭であり、海上移動は基本的に閉じた関係であるが、下田原期において在地文化の中に島外からの影響を見いだせる可能性がある。
- ・琉球列島の先史人は、目視が容易な範囲内での海上移動には積極的であるが、これを繋いで遠方に至る連続的海上移動や、見えにくい地域への移動では極めて消極的である。この消極性は裾礁型文化のもつ高い安定性と無関係ではないだろう。

小稿は中国廈門大学海洋考古学研究中心主催の「重建海上丝绸之路史前史：东亚西新石器时代海洋文化景观国际学术研讨会」（2017年10月29日～11月2日）で発表した内容を、大幅に加筆修正したものである。執筆にあたり、陳有貝副教授（国立台湾大学）ならびに郭素秋副研究員（中華民國中央研究院）に教示を得た。記して感謝申しあげる。

注

- (1) 0.01km²以上の面積をもつもの。目崎茂和1985による。
- (2) 裾礁型文化は、裾礁環境に適応して成立し、採集・漁撈・狩猟を主体とした文化で高い安定性をもつことを特徴とする。この文化は琉球列島に裾礁が完成するのと並行して3500 BP前後に成立し、以下の特徴をもつ。①生業におけるサンゴ礁地形の全面的使用。②貝殻素材の生活文化への積極的使用。③精神文化のサンゴ礁環境への依拠。④大型巻貝・海獣骨を素材とする独自の造形の発達。⑤礁内活動を主体とし礁外活動には消極的な傾向。
- (3) 宮古・八重山諸島の研究動向と課題については山極海嗣氏が詳細に整理し考察しており、以下の結論を示している。「宮古・八重山諸島の物質文化は、基本的には孤立した島嶼地域のなかでの人類活動によって形成された」（山極2016：p.158）これに対し、南琉球と東南アジアとの関係を重視する視点もあり（安里2010）、重要である。
- (4) 1950年を起点に遡って何年前の意味でBPを使用する。較正年代が報告されているものについてはcal BPと表記する。
- (5) 最近の台湾の土器研究によると、4000 BP前後に中国東南部沿岸地域に展開した複数の先史文化（福建省曇石山文化後期、庄辺山上層文化、良渚文化後期）が台湾海峡を越えて台湾島に及び、在地の大坌坑文化に大きな影響を与えて、続く先史文化の地域化を促進したことが明らかにされている（郭2014）。一方これより遅れる時期（紀元前2千年紀後半）、初期のラピタ集団が台湾からフィリピンを通してバヌアツ（メラネシア）に至ったことが古人骨のDNA分析から示唆され、これとは別に3500 BP頃にはマリアナ赤色土器をもつ集団が東南アジアからマリアナ（ミクロネシア）に植民しているという（印東2017）。ラピタ文化については石村2011に詳しい。
- (6) 八重山諸島の無土器時代の遺跡において、開元通宝（唐銭 621年初鑄）が33枚出土し（石垣市崎枝赤崎遺跡）、台湾北部の遺跡（台北市十三行遺跡 1800～800 BPを中心とする集落遺跡）でも同様に多数が出土している。このことは7世紀以降における台湾と八重山諸島との往来を考えさせるが、これについて筆者は中国南部を根拠地とする経済活動によるものであった可能性が高く、2島間の交流とは分けて評価すべきことと考えている（木下2000）。
- (7) 近年の発掘調査により沖縄本島のサキタリ洞穴、ティーラガマ、藪地洞穴でそれぞれ9000 cal BP、11000 cal BP、7700 cal BPの年代を示す土器が発見され、石垣島竿根田原遺跡では9000 cal BPの層で土器が検出されている。
- (8) 数値は目崎1980論文第2表から宇治諸島・草垣諸島・尖閣諸島・大東諸島を除いたもの。
- (9) 沖縄本島前原遺跡Ⅸ層出土例。丸木舟の木材による放射性炭素年代は2120-2080 cal BC、2050-1945 cal BC。知名編1999：pp.278～279による。
- (10) 台南の南関里遺跡の発掘調査によって、5000 BP、すなわち大坌坑文化期に台湾西海岸でアワ、キビ

が消費されていたことが明らかになっている (Chen-Hua Tsang et.al 2017)。

- (11) 玉質の角閃石等を正円形にくりぬく技術のこと。
- (12) この時期の重要性については後藤雅彦も早く指摘している (後藤2007)
- (13) ここでいう「共通する特徴をもつイモガイ珠」とは、直径 3～20mm、高さ 1～10mm、平面系が正円をなす貝製玉を指している。これらは海浜で採集した小型イモガイ螺塔の殻頂に孔を穿ち、これを複数個 (おそらく 10～30個) 紐で連ねて両側を固定し、平たい砂岩 (細い溝をもつ場合もある) をあてて回転させながら研磨して均一な大きさにしたと推測される。同じ形状のイモガイ珠はオセアニアの民族例でいくつかの方法が知られているが、製作には一定レベルの技術を伴う。こうして製作されたイモガイ珠は複数個が同時に出土し、ほぼ同じ直径の正円をなすことが特徴である。この特徴をもつイモガイ珠は、時期を異にして琉球列島全域にみられるが、宮古諸島・八重山諸島では今のところ下田原貝塚でのみ知られる。下田原貝塚のイモガイ珠は直径 4～12mm、高さ 1～5 mm で、27個みつき、このほかに未成品も多い。台湾南部の墾丁遺跡 (屏東県) でも同様のイモガイ珠が埋葬に伴って数百個出土している。大きさは直径 4～20mm、高さ 1～5 mm と報告される。鵝鑾鼻 (屏東県) でも同様なイモガイ珠が 4 個報告されている。二つの遺跡の時期は 4000 BP 前後とみられ、下田原貝塚の時期に重なる可能性が高い。この時期、八重山諸島と沖縄諸島に文化の往来は認められないので、イモガイ珠の製作の登場は、下田原貝塚で自生したあるいは台湾からの影響で登場した、の二つの可能性がある。
- (14) 多良間島の添道遺跡で下田原式土器の文化が確認されている (岸本編1996)。
- (15) 最近の調査成果で無土器時代の前半に 2760 cal BP～1880 cal BP の年代値が与えられている (アラフ遺跡発掘調査団2003)。
- (16) 江上幹幸氏はアラフ遺跡の成果をもとに、無文土器人が宮古島に登場した 2800 BP の八重山諸島に先史遺跡がみられないことから、「宮古島の人々は、何処かの地から焼石調理法を携えて移動を開始し、八重山諸島を経由してではなく、彼の地から直接あるいは何処かを經由して宮古島に居住した」可能性を提起している (江上2015：p.10)。焼石は具体的には蒸焼き調理に使われた可能性が高いとされる。
- (17) クラKula とは、ニューギニア島東南端周辺の諸島群でみられる儀礼的贈物交換の体系で、無文字社会の交換の例として知られる。儀礼的財物贈与の際には市場原理に基づく交易もおこなわれるという (小林1987)。
- (18) 実物で検証された例はない。貝交易を通して沖縄に頻繁に搬入される大小の壺からの類推である。
- (19) ゴホウラ類は、ゴホウラ *Strombus latissimus* ; *Strombus (Tricornis) latissimus* Linnae とアツソデガイ *Strombus thersites* ; *Strombus (Tricornis) thersites* Swainson を指す。沖縄諸島のサンゴ礁の海底に多く生息する。貝類については久保・黒住1995に拠った。
- (20) イモガイ類は、イモガイ科の中でも大型のアンボンクロザメ *Conus litteratus* ; *Conus (Lithoconus) litteratus* Linnaeus とクロフモドキ *Conus leopardas* ; *Conus (Lithoconus) leopardas* Hwass を指す。沖縄諸島のサンゴ礁の海底に多く生息する。
- (21) ヤコウガイ *Turbo (Lunatica) marmoratus* (Linnaeus) は内側の真珠層が漆器の装飾に利用された。ヤコウガイは奄美群島、沖縄諸島のサンゴ礁外側のやや深い所多く生息する。
- (22) ホラガイ *Charonia tritonis* (Linnaeus) は仏教寺院で楽器に使われた。ホラガイは沖縄諸島のサンゴ礁

外側のやや深い所に多く生息する。

- (23) あと一つの大型島は宮古島で低島である。低島ばかりで構成される宮古諸島の先史文化は、シャコガイ斧の多用等において琉球列島でも独自性をもつ。

文献

日本語

- 安里嗣淳 2010「南琉球の先史文化と東南アジア」『南海を巡る考古学』、pp.159～182、同成社
- アラフ遺跡発掘調査団（江上幹幸・馬淵和雄編）2003『アラフ遺跡調査研究Ⅰ』六一書房
- 石村 智 2011『ラピタ人の考古学』溪水社
- 印東道子 2017『島に住む人類 オセアニアの楽園創世記』臨川書店
- 江上幹幸 2015「無土器期の位置づけ」『沖縄考古学会2015年度研究発表会資料』、pp.4～12、沖縄考古学会
- 岸本義彦・金城亀信・金子浩昌・島袋春美編 1992『多良間添道遺跡発掘調査報告』多良間村文化財調査報告書第11集、多良間村教育委員会
- 木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学』、pp.203～250、横山浩一先生退官記念論文集刊行会
- 1999「東亜貝珠考」『先史学・考古学論究Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集』、pp.315～354、龍田考古会
- 2000「開元通宝と夜光貝—7～9世紀の琉・中交易試論—」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』、pp.187～219、高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 2012「琉球列島における先史文化の形成と人の移動—島嶼間の人文地理的關係に注目して—」『文学部論叢』第103号、pp.13～27、熊本大学文学部
- 金城亀信・金武正紀編 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県教育委員会
- 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代史の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社
- 久保弘文・黒住耐二 1995『生態／検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版
- 後藤雅彦 2007『紀元前2千年紀の南中国沿岸と琉球列島の考古学研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、琉球大学法文学部考古学研究室
- 小林繁樹 1987「クラ」『文化人類学事典』、pp.229～230、弘文堂
- 島袋綾野・得能壽美・松村順一編 2008『石垣市史考古ビジュアル版 第2巻 下田原期のくらし—八重山諸島最古の土器文化』石垣市
- 高宮廣衛 1978「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」『南島考古』第6号、pp.11～22、沖縄考古学会
- 知名定順編 1999『前原遺跡—県道漠那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書—』宜野座村乃文化財14集、宜野座村教育委員会
- 藤岡謙二郎 1985『新日本地誌ゼミナールⅥ九州地方』大明堂
- 目崎茂和 1980「琉球列島における島の地形的分類とその帯状分布」『琉球列島の地質学研究』第5巻、pp.91～101、琉球大学教養部地学教室
- 1985『琉球弧をさぐる』あき書房
- 山極海嗣 2016「宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明：遺跡属性と生態資源利用の地域間比

較を通した文化形成の考察」琉球大学、<http://hdl.handle.net/20.500.12000/33725>、最終アクセス2017年9月10日

2017「南琉球地域から見た東南アジア『貝斧利用文化』北上の可能性」『東南アジア考古学』第37号、pp.19～34、東南アジア考古学会

山極海嗣・久貝弥嗣 2017「先史時代における沖縄県宮古島を中心としたシャコガイ製貝斧の展開—浦底遺跡出土貝斧の分析を基にした時空間的変異の検証—」『物質文化』97、pp.113～131、物質文化研究会

英語

A.R.Radcliffe-Brown 1933. *THE ANDAMAN ISLANDERS*, Cambridge: The University Press.

Chen-Hua Tsang et.al 2017. 'Broomcorn and foxtail millet were cultivated in Taiwan about 5000 years ago', *Botanical Studies*,58:3: 1-10

中国語

陳有貝・森威史(訳) 2004「生業の視点で捉えた台湾と先島諸島との先史文化関係」『南島考古』第23号、pp.31～42、沖縄考古学会

郭素秋 2013「縄文時代に併行する台湾の縄蓆文土器とその文化様相について」『講座日本の考古学 3 縄文時代(上)』、pp.684～702、青木書店

2014「四千年前後の台湾與中國東南地區文化様相」『從馬祖列島到亞洲東南沿海：史前文化與體質遺留研究國際學術研討會』、pp.138～219、中央研究院歷史語言研究所・連江縣政府文化局

2016「臺灣北部訊塘埔文化的內涵探討」『臺灣史前史專論』(劉益昌編)、pp.185～246、聯經出版事業公司

劉益昌 2002『台灣原住民史 史前篇』國史館台灣文獻館

2011『台灣全志 卷三住志考古篇』國史館台灣文獻館

臧振華 2012「再論南島語族的起源與擴散問題」『南島研究學報』第三卷第一期、pp.87～119、國立台灣史前文化博物館